ぽっぽニュース

TOPICS

新たに「がん放射線療法看護認定看護師」が誕生しました！

去る7月14日、当院画像診断センター所属の有薗恵子看護師が新たな認定看護師資格を手にし、看護体制のさらなる充実に向け歩みはじめました。いずれ本誌「リソースナース」コーナーからも発信してまいりますが、まずは有薗より資格のご紹介と、今後の活動への抱負をお伝えいたします。

「がん放射線療法看護認定看護師」とは
放射線治療を受ける患者さんやご家族に対して治療を安全・確実に継続して行えるよう支援する役割を担います。

「放射線療法は、手術療法、化学療法と並ぶがん治療の3本柱のひとつです。がんの早期から終末期まで、あらゆる時期に使用され、大きな治療効果をあげています。しかし、まだ放射線療法についてよく知らない方や、マイナスイメージを持たれている方もいらっしゃいます。今後はより多くの方に放射線療法のことを知っていただくと同時に、安心して治療が受けられるよう患者さんやそのご家族に寄り添い、支えていきたいと思います」

お知らせ　今秋、緩和ケア病棟スタート！

内覧会・オープンホスピタルのご案内

入場無料
事前申込不要

かねてより準備を進めてまいりました当院緩和ケア病棟が、今年11月1日より開設の運びとなりました。つきましては、これに先立ち、内覧会・オープンホスピタルを開催いたします。ぜひお誘い合わせの上、お越しくださいませ。

●日時：平成29年10月28日(土)・29日(日) 10：00～14：00(最終受付13：30)

※28日は
- ミニ健康講座
- 病院探検
- リハビリ体操
- チャリティバザー
- こども薬局（お薬を作ろう！）
- イコちゃん、あべのんと写真撮影

等その他イベントあり

“私達は人間性を尊重し、謙虚で誠実な医療を提供します”

【基本方針】
安全を積み重ね、患者さんから信頼される医療に努めます。
地域中核病院としての役割を認識し、住民の皆さんの健康増進に努めます。
地域医療機関との連携を重視し、きめ細かな医療に努めます。
専門性を追求し、医療レベルの向上と人材の育成に努めます。
急性期医療から回復期医療まで、良質な医療の提供に努めます。

JR 大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company
〒545-0053 大阪市阿倍野区松崎町1丁目2-22
TEL.06-6628-2221 FAX.06-6628-4707
ホームページ http://www.jrosakahosp.jp

受付時間／午前8時30分～午前11時00分
診療開始／午前9時00分～
休診日／土日祝・年末年始（12月30日～1月3日）

201709

JR 大阪鉄道病院
Osaka General Hospital of West Japan Railway Company

地域連携

ぽっぽ

よりよい医療の始発駅

Vol. 4
2017 September

診療科 UPDATE
呼吸器内科
ドクターインタビュー　部長 藤井達夫
医師紹介／ドクターメッセージ　医長 玉垣学也

専門領域を究めるリソースナースたち
摂食嚥下障害認定看護師 菊地香織／
皮膚・排泄ケア認定看護師 柿元奈緒子

チーム医療を支える視点
リハビリテーション室　リハビリテーション技師長 上村洋充

登録医紹介
岡医院

ぽっぽニュース

ドクターインタビュー

部長

藤井達夫

藤井 達夫（ふじいたつお）
1963年奈良県出身。1988年大阪市立大学医学部卒業後、同大学附属病院第一内科入局。博士号取得後、98年医長として当院に赴任。2003年より現職。日本内科学会認定内科医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医。

幅広い疾患に対応しつつ増加する肺がん診療も充実。

良好なチームワークで診療に専念

当院呼吸器内科は大阪市立大学医学部の呼吸器内科学教室を母体としています。大学に近いという地の利を生かし、情報や技術の共有、病病連携もスムーズに、常に最新の医療が提供できる体制を整えています。また阿倍野区、東住吉区、平野区3つの医師会と連携して地域医療とも密接にかかわっています。

当科の大きな強みは、呼吸器内科の全領域を網羅している点であると自負しています。肺炎、気胸、喘息、間質性肺炎、COPDのような慢性呼吸不全、そして肺がんと、多岐にわたります。現在のスタッフは私以外は経験4年から12年目の若い医師ですが、みな患者さん思いで向上心が強く、頼もしい布陣です。日々多忙ながらもとてもよい雰囲気で診療、治療にあたっています。

変わりゆく肺疾患事情

私自身が呼吸器内科を志したのは、内科医としてオールラウンドな知識と技術を身につけたいと励む日々のなかで、呼吸器内科の素晴らしい先輩医師と出会い、学びを深める機会に恵まれたからです。また、呼吸は人間が生まれてから死ぬまで止めることができない重要なものであること、一般的な疾患から肺がんなどの腫瘍まで、幅広く扱うことができるのも医師として魅力に感じました。

大学ではCOPDを専門として研究してきましたが、その後、当院に来てすでに20年近く、疾患の状況も大きく変わってきました。COPDの患者数は、残念ながら高齢化とともに増え続けています。厚生労働省の統計によると2015年のCOPDによる死亡者数は約16,000人近くでした。COPDは20年以上の喫煙歴を経て発症する病気です。つまり、近年では喫煙率が低下しているとはいえ、20年以上前の喫煙率上昇の影響がCOPDの死亡率を高めているといえるのです。COPDであるのに受診していない人もまだ多くいると考えられ、加齢とともに発症率が高まる事実から想定しても、まだまだ予断を許さない状況です。

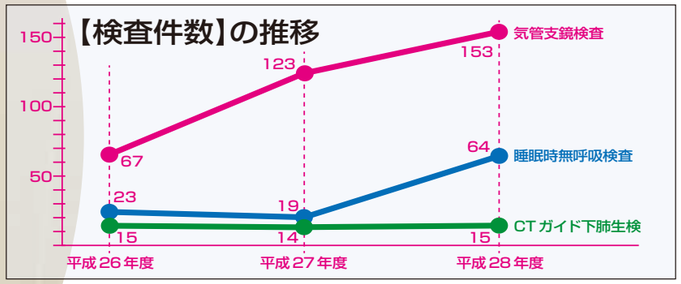
しかしながら、それを凌駕する勢いで肺がんが増加してきたのです。

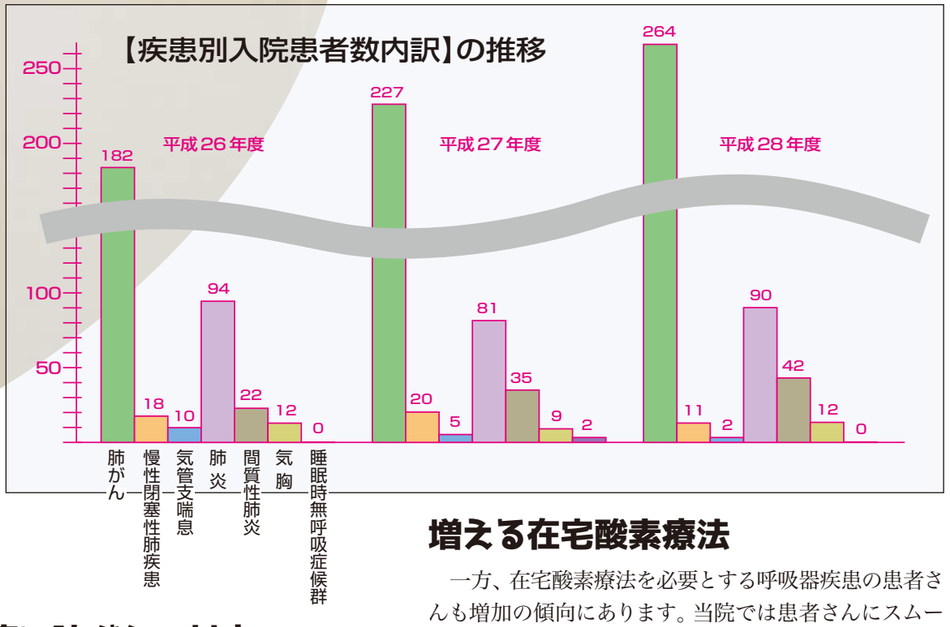
プロフィール+α

学生時代はバレーボール部所属。身体を動かすことが好きで、現在の趣味はゴルフ（スコアは90くらい）と登山ですが、どちらも最近あまり行けていないんですよね。

【診療実績（平成28年度）】

外来患者数	48.4人／日
入院患者数	24.3人／日
平均在院日数	16.0日





チーム医療で肺がんに対応

ご存知のように、日本人の死亡原因の1位を占めるがん、なかでも肺のがんは、2015年の統計では男女ともに1位となっています。当科ではいち早く日進月歩の肺がん診療に対応すべく、呼吸器内科としてできうる限りの体制を整えてきました。

この春より超音波内視鏡も導入、低侵襲で速やかに肺がんの確定診断を得ることが可能になっています。小さな腫瘍も診断できるよう技術を高めていますので、先生方も胸部レントゲン検診等で気になる点がございましたら、どうぞ早期にご紹介ください。

治療に関しても、呼吸器外科、放射線治療科との連携による集学的治療の実践、この秋に完成する緩和ケア病棟でのフォローなど、大阪府がん診療拠点病院として肺がん治療の総合的なレベルアップを目指しています。

増える在宅酸素療法

一方、在宅酸素療法を必要とする呼吸器疾患の患者さんも増加の傾向にあります。当院では患者さんにスムーズな療養生活を送っていただけるよう医師、看護師、理学療法士、酸素業者など多職種が連携してフォローにあたっています。登録医の先生方のもとにも、在宅酸素療法の患者さんがいらっしゃると思いますが、特に急性増悪にはご注意いただき、少しでも状態が悪くなれば早めに専門医に紹介されることをおすすめします。

呼吸器内科の未来を担って

このように、呼吸器疾患の患者さんは、今後もさまざまな形で増えていくことが予測されます。一方で、近年では呼吸器内科の専門医の不足が深刻な状況で、学会でも懸念されています。当科としては、できるだけ呼吸器内科を目指す若い医師を育成することも課題のひとつです。その魅力が伝えられるよう、研修医に対する指導にもいっそう熱を入れていきたいと思っています。

医師紹介

向上心と熱意をもって呼吸器内科の幅広い領域に挑む。

晋山 真実（しんやままみ） 医長 日本内科学会認定内科医

呼吸器内科は、学生時代のポリクリでローテーションした科のなかでも一番しんどかったのですが、わかりやすさと面白みを感じたことが選ぶきっかけとなりました。しかし勤めはじめてから、こんなに難しい科だったんだと実感しました。特に肺がんは、治療薬が次々と開発されるなど常に勉強が必要であったり、ご家族の思いや患者さんの背景も含め、どういう生活をされたいかというご希望を汲み取りながら治療方針を決める難しさがあったりなど、一筋縄ではいかない分野ではありますが、やりがいを感じています。これからも患者さんのご希望に寄り添いながら、診療、治療に力を尽くしてまいります。

泉 源浩（いずみもとひろ） 医師

呼吸器内科医としてスタートして５年目です。多彩な症例を診てきたなかでも、特に深い関心を持ったのは肺がんです。現在は大学院でも専門的に学んでいる最中です。最新の知識や情報を取り入れ、それを活かした最適の治療ができるよう、患者さんと真摯に向き合っていきたいと思います。一方、もちろん当院ではさまざまな分野の疾患を幅広く扱っているので、今後はさらに地域連携を強化し、登録医の先生方のご要望にお応えしていきたいと思います。

津田 誉至（つだたかのり） レジデント

昨年４月にこちらに赴任して、まだまだ勉強していかなければならないことばかりだと感じる日々です 。今はとにかく幅広い経験を積み、基本的な知識技術をしっかりと網羅した上で、自分なりのテーマを見つけ、深めていくことができたらと思っています。医師としては、データだけを頼りに治療方針を決めるのではなく、患者さんの訴えをしっかりと聴く姿勢を大切にしたいです。いつも心に余裕をもって診療ができるように、がんばってまいります。

＜非常勤＞

仲岡 裕右（なかおかゆうすけ）

呼吸器全般

●禁煙外来担当

日本内科学会認定総合内科専門医、日本呼吸器学会認定呼吸器専門医

田中 秀典（たなかひでのり）

呼吸器全般

日本内科学会認定総合内科専門医、日本呼吸器学会認定呼吸器専門医、日本がん治療認定医機構がん治療認定医、日本結核病学会結核・抗酸菌症認定医、ICD

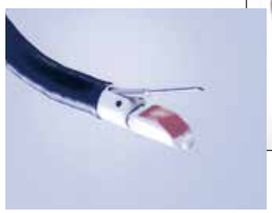
＜ドクターメッセージ＞

超音波内視鏡（EBUS）のすすめ　医長 玉垣 学也

肺がんの最終診断、治療法決定のために、病巣の明瞭な抽出や肺門・縦隔リンパ節への転移の有無を確認することはきわめて重要です。従来の気管支鏡検査は、病理組織診断には必要不可欠な方法ですが、縦隔のリンパ節等に関しては診断能力に限界があり、外科的検査に頼らざるを得ませんでした。当然、患者さんへの負担は、少なくなかったといえます。

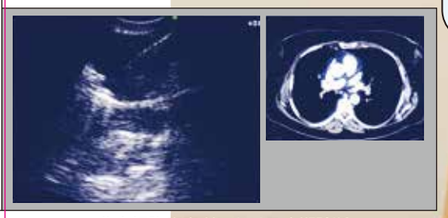
そこで登場した超音波内視鏡は、内視鏡の先端にエコープローブを取り付け気管に挿入できるもので、気管支壁、気管支周囲組織の超音波断層像を得ることが可能です。これにより、気管の内外の検査が内科的に低侵襲で安全かつ正確に行えるようになりました。いまや縦隔病変の診断や肺がんの縦隔病期決定は、外科的な検査方法に代わってこの超音波内視鏡検査が主流となりつつあります。

当院では、私が大阪市立大学附属病院在籍時にその導入に携わった経験を生かし、今年３月に導入が実現しました。現在、私を含め経験豊富な医師２名体制で順調に稼働しています。縦隔リンパ節の腫れがみられる患者さん等、肺がんの精密検査は、ぜひ安心しておまかせください。



エコープローブ

超音波内視鏡



非小細胞癌患者における病期診断

プロフィール＋α

趣味はテニス。鳥取大学時代は中国地方大会でベスト16 に入った経験も。現在は泉医師と一緒に週に1回テニススクールに通い、汗を流しています。

玉垣 学也（たまがきがくや） 医長

2006年鳥取大学医学部卒業後、和泉市立病院、育和会記念病院、大阪市立大学附属病院を経て 2015 年より当院へ。総合内科専門医、日本内科学会認定内科医・指導医、日本呼吸器学会専門医、日本アレルギー学会専門医、ICD。

Expert! 専門領域を究めるリソースナースたち

当院で活躍する認定看護師から、多彩な情報を発信いたします。

嚥下障害のある患者さんへの個別ケア

摂食嚥下障害認定看護師　**菊地 香織**

院内では、脳卒中の回復期リハビリテーション中の患者さんや、ご高齢で嚥下機能が低下されてきた患者さんを対象に、おいしく安全に食べていただくためのさまざまな取り組みをおこなっています。一口に嚥下障害といっても、人によって状態が違います。まずはその方の嚥下評価をしっかりとさせていただき、個別の食事形態やケアの方法を立案するのが基本の流れです。たとえ嚥下機能が低下しても、食事形態や環境、介助方法、姿勢など環境を工夫すれば、安全に食べられるようになることもあります。病棟では、誰が担当してもその方に応じた介助ができるよう、情報共有を徹底しています。

しかし実際問題として、本当に大変なのはご退院後です。毎食の嚥下食づくりと食事介助は、それだけでご家族のプレッシャー。精神的にも苦しく、患者さんの前で普通にごはんを食べるのは申し訳ないと、隠れて食事するようになる方も少なくないほどです。でも、現在はユニバーサルデザインフードといって嚥下障害の方向けのレトレト食品などが市販されています。また、ご家族と同じ食事でも、例えば煮物をご家族の分を仕上げたあと、さらに火を入れて柔らかくするとか、繊維を切るなどのわずかの手間と工夫で、同じものを食べていただくことができます。患者さんもご家族もできるだけ負担を感じないような生活の工夫を、かかりつけの先生からもお伝えいただけたらと思います。また、嚥下障害は状態が良くも悪くも変化していくものなので、どうか定期的な評価をお願いいたします。誤嚥性肺炎についても、わずかな症状を見逃さず早期発見していただくことで、患者さんの生命が守れます。嚥下トレーニングや嚥下食について、ご質問やご相談がありましたらお気軽にお声がけください。

在宅での褥瘡ケアへの対応をひとつの目標に

皮膚・排泄ケア認定看護師　**柿元 奈緒子**

当院では、多職種（医師、薬剤師、栄養士、理学療法士、看護師、事務、皮膚・排泄ケア認定看護師）で構成された褥瘡対策チームが稼働しており、褥瘡回診や褥瘡対策委員会、職員を対象とした研修の開催などをしています。今後は、院内にとどまらず地域に活動の場を広げられればと願っています。たとえば訪問看護ステーションの連携により訪問看護師と皮膚・排泄ケア認定看護師が同行訪問するなどして、在宅で悩んでおられる患者さんとそのご家族にこそ褥瘡の正しいケアを実践していければと思います。具体的な体制づくりまでにはまだお時間をいただくことになると思いますが、地域医療充実のためにも、ぜひ実現したいものです。

また、当資格の専門分野は、ストーマや失禁対策にもわたっています。当院の取り組みとしては、失禁ケアの質を高めるべく、患者さんの体型や排泄量に応じたおむつを個別に選択して提供しています。特に夜間に関しては、ぐっすり眠っていただけるよう、朝までの排泄量を管理し、それに見合った吸収量のパットを選択するなど、あくまで患者さん目線での排泄ケアに努めています。

個人的なことを語らせていただくと、当初、知識のないままに褥瘡ケアに取り組んでいた頃は、やってもやっても治らないイメージで、非常に苦手に感じていました。それが、約5年前に認定資格を取得した先輩から正しいレクチャーを受けることで、180度変わったのです。皮膚・排泄ケア分野は学ぶほどに面白く、そのまま私自身も資格取得に至った次第です。現在は当院の皮膚・排泄ケア認定看護師は私1名ですが、私が先輩に育てられたように、ともに取り組める人材を育成していくことも課題のひとつです。

MEDICAL POINT チーム医療を支える視点

リハビリテーション室

リハビリテーション技師長　**上村 洋充**

急性期病棟と回復期リハビリテーション病棟が併設されている当院のリハビリテーション室では、全科を対象に医師がその必要を判断した患者さんにリハビリテーションを提供しています。基本的なスタンスとして、入院患者さんに地域の生活基盤に帰っていただくための取り組みを主としています。お一人お一人に充実したリハビリテーションを提供したいという私たちの思いを反映し、現在、スタッフは理学療法士22名、作業療法士10名、言語聴覚士3名と、手厚い対応の可能な人員数を確保しているのが、当院の特長のひとつです。

また、年々在院日数が短縮するなか、よい状態で早期に回復していただくために、入院患者さんを対象としたリハビリテーションを土、日、祝日も運用しています。このほか、治療効果の高い機器の導入や、脳梗塞におけるCI療法の実践など、常に最新の情報を取り入れ、よりすぐれた機器や治療法の検討・採用を心がけています。今後も総力を結集し、さまざまな状態にある患者さんに寄り添えるリハビリテーションを提供してまいります。

なお、昨年度から「暮らしサポートリハビリ講座」というイベントを年3、4回展開し、広く地域のみなさんへの情報提供を行っています。地域での安心安全な生活を守っていただく足がかりとして、地域の先生とともに考えていく機会にもなればと思いますので、患者さんにおすすめいただくとともに、登録医の先生方にもご参加いただけたら幸いです。

登録医紹介

岡 医 院

標 榜 科：内科／小児科／胃腸科／循環器科
住　　所：〒545-0021
大阪府大阪市阿倍野区阪南町3丁目41-5
電話番号：06-6622-4821
アクセス：市バス 北畠公園前 徒歩5分

── 御院についてお聞かせください。

1992年10月より父の後を継ぎ、同じ場所で岡医院を開業しました。現在は、私と妻、2名の医療体制で診療を行っています。大学では、私は消化器内科、妻は循環器内科を専攻しておりましたが、開業してのちは、父と同様、専門的な診療に偏ることなく、幅広くかかりつけ医として日々診療に従事しています。お子さんの急性疾患や予防接種から、生活習慣病や御高齢の方の在宅医療まで、幅広く対応いたしております。

──今後の抱負をお聞かせください。

今後も鉄道病院はもちろんのこと、近隣の病院の先生方との連携を密にし、患者さんお一人お一人に最善・最適な医療を受けていただけるよう心がけて、日々努力していきたいと思っています。

──御院にとってJR大阪鉄道病院とは。

病診連携において、鉄道病院には特にお世話になっています。専門性の高い医療や最新鋭の機器による検査等、私達開業医にとって最高のパートナーであることは間違いありません。これからも、お互いの強い絆で力を合わせ、地域医療に貢献できることを願っています。

──ご要望がございましたらお聞かせください。

今後の地域医療構想においては，在宅医療・地域包括ケアシステムが重要となってまいります。地域の方々に安心して在宅医療を享受していただくためにも、その後方支援として地域に根ざした病院の重要性はますます高くなるものと思われます。鉄道病院とのさらなる病診連携を期待しています。